

VI—2 松山平野における非陶邑系須恵器に関する一考察

梅木 謙一

1. はじめに

近年、西日本各地で須恵器窯跡が発見、調査され、特に5世紀代の須恵器生産が多様な様相をもつことが指摘されはじめた（橋口達也1990）。

松山平野においても、この10年間に非陶邑系須恵器が平野内の数遺跡で出土し、1992年には長井数秋氏により初期須恵器窯（伊予市市場南組窯跡）が発見される（長井数秋1992）など、松山平野の5世紀代の須恵器生産とその様相は弱々にはあるが明らかになりつつある。

本稿では、5世紀代の松山平野の集落構造及び須恵器生産の実態把握のため、松山平野出土の非陶邑系須恵器の比較検討と、それ等が属する集落の側面を明らかにするものである。

論述に際しては、まず定森秀夫氏が指摘する「同じ窯で同じ工人が製作したかのようである」酷似する資料3点を比較検討し、その立証を行う（定森秀夫1993）。つづいて、酷似品が出土する集落（5世紀代）の様相を概観し、非陶邑系須恵器保有の背景を追究していく。

2. 酷似する壺3点

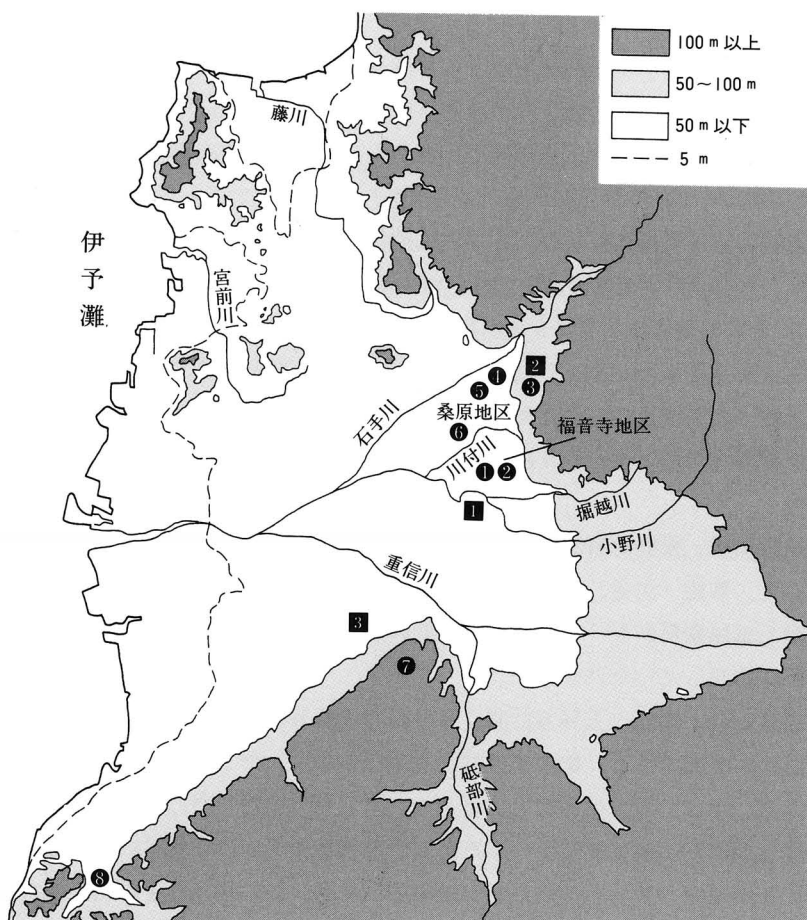
松山平野では、非陶邑系須恵器・陶質土器の出土は約10遺跡10数例におよぶ。このうち定森氏が指摘するように、壺においては製作手法・分量が酷似するものが3点あり注目されるものとなっている。以下、3点の酷似性を立証するため、まず該当資料について出土遺跡、出土状況、共伴遺物を概観し、次に資料の比較・分析を行うものとする。

1) 東山古墳群5次調査他（松山市東石井町2139-2他、田城武志1993）

東山古墳群は、松山平野のほぼ中央に位置する独立丘陵上に立地する（第79図）。平成5年度までに6次にわたる調査が実施され、横穴式石室をもつ後期の群集墳地帯であることが明らかとなっている。5次調査は、丘陵頂部の東側部分にて、幅3m、全長200mに対して実施されたものである。調査では、石室を5基と周溝を検出した。このうちT4（第4トレンチ）の調査では、2基の石室と石室より30m離れた地点で非陶邑系須恵器の壺が出土している（第80図1）。出土状況は、緩傾斜地を削平し凹地を造成した後、鉄鍬直上に非陶邑系須恵器の壺と土師器の壺が各1点並べられて置かれている状況にあった。この他、T4からは先の2点の周辺より（10～20cm離れた同じ土壌より）非陶邑系と思われる須恵器の高坏坏部片1点と、3m程離れた地点より土師器の高坏（完成品）1点が出土している（第83図4～6）。

2) 東野お茶屋台古墳群（松山市東野4丁目、阪本安光1979）

東野お茶屋台古墳群は、松山平野北東部にある低位段丘陵上に立地する（第79図）。昭和50年から3次にわたる調査が行われ、群集墳の一部が検出されている。このうち、3次調査（昭和53年）により検出された9号墳の周溝からは非陶邑系須恵器の壺が出土されている（第81



- ① 東山古墳群 ④ 福音寺筋違H遺跡 ⑦ 樽味立添遺跡 ⑩ 猪の窪古墳
 ② 東野お茶屋台古墳群 ⑤ 福音小学校構内遺跡 ⑧ 樽味高木遺跡 ⑪ 市場南組窯跡
 ③ 出作遺跡 ⑥ 畑寺竹ヶ谷古墳群 ⑨ 桑原本郷遺跡

第79図 非陶邑系須恵器出土の主要遺跡とその周辺 (S = 1 : 180,000)

表35 非陶邑系壺の計測値

※ () は復元値

遺 跡	計測値							波 状 文			櫛数(本) 上・中・下	叩 き	叩き目大 (cm)
	器高(cm)	口径(cm)	頸 部 径 (cm)	胴最大径 (cm)	口縁~凸帯 (cm)	口 頸 長 (cm)		上(山数)	中(山数)	下(山数)			
東 山	24.4	17.5	13.5	25.8	1.6	5.2		(32)	31	45	6・4・4	正格子	4×4
東 野	25.0	17.7	13.6	26.7	1.7	5.0		(40)	(40)	(52)	10・6・6	斜格子	4×5
出 作	25.2	17.4	14.2	27.3	1.5	4.8		41	39	53	8・6・6	正・斜格子	$\begin{smallmatrix} 3.5 \times 3.5 \\ 4.5 \times 4 \end{smallmatrix}$
最大差	8mm	3mm	7mm	15mm	2mm	4mm		9	9	8	4・2・2	正・斜	1.5mm

図2)。9号墳は周溝の一部を検出するにとどまり、墳形は方墳ではないかと報告されている。周溝は、幅3m前後、コーナー部分では6mを測る。溝内からは、須恵器、土師器、鉄器等が出土しているが、報告掲載図版からすると原位置ではなく流入品である可能性が強い遺物である。なお、この周溝からは、先の壺出土地から4m離れた地点より初期須恵器に属する器台が出土している。(第83図7)。

3) 出作遺跡(伊予郡松前町出作、相田則美他1993)

出作遺跡は、松山平野南西部の沖積低地上に立地する(第79図)。調査は昭和52年度に行われ、約3,000m²中に祭祀遺構3基(5世紀後半～6世紀前半)、自然流路2条(註1)、竪穴式住居1棟、焚火跡多数などが検出されている。このうち、祭祀遺構SXO2からは、多量の須恵器と土師器、石製模造品、鉄製品が出土している。該当資料(第82図3)はSXO2から出土しているがSXO1からも非陶器系須恵器は多数出土している。

4) 比較

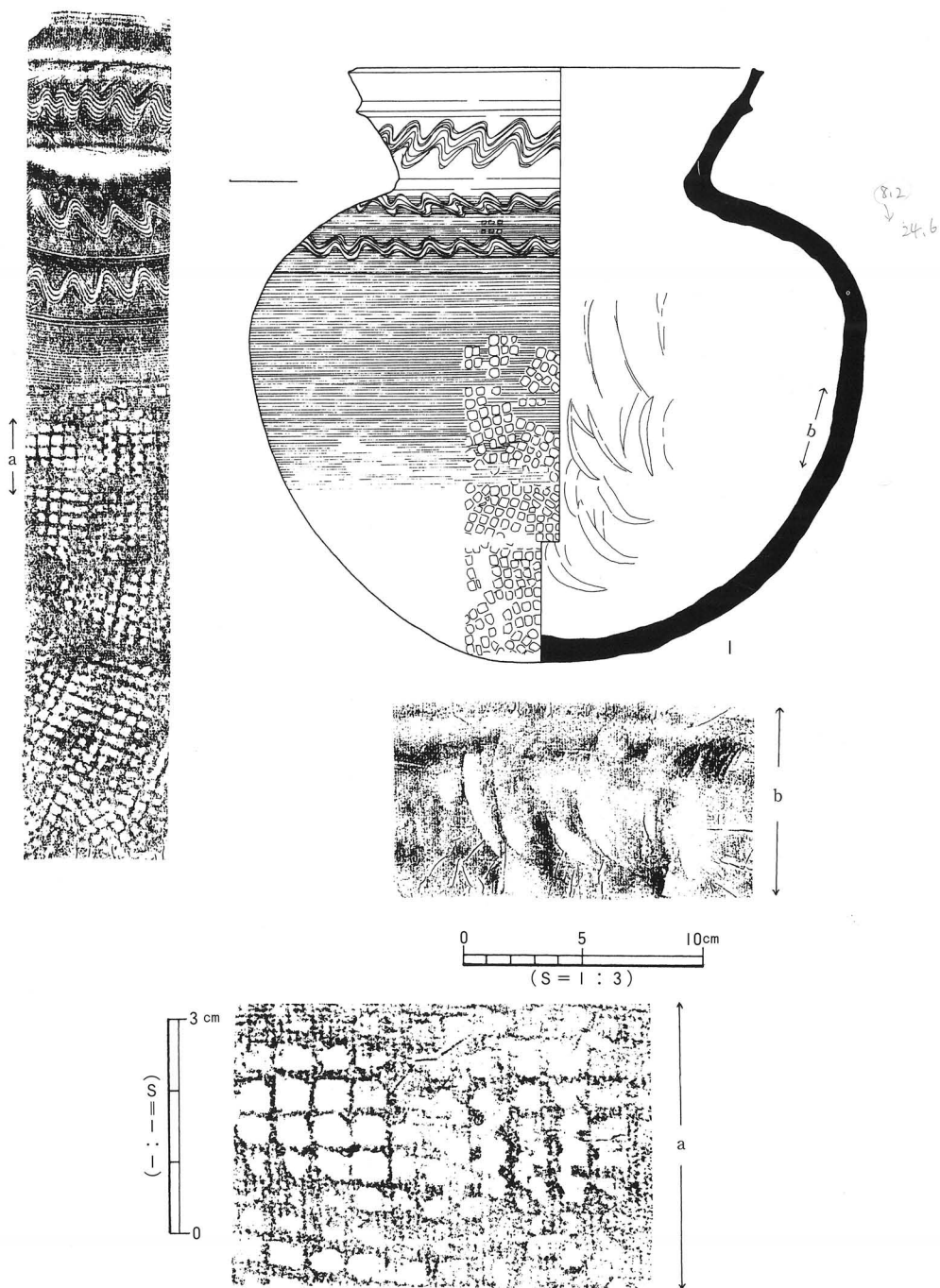
次に、東山古墳群、東野お茶屋台、古墳群、出作遺跡より出土した酷似する非陶器系須恵器の壺について、形態、法量、成形・調整、施文等について比較分析するものとする。なお、以下論述に際しては資料名を「東山の壺、東野の壺、出作の壺」と略称し、資料の詳細は観察表(表35)を参照していただきたい。

①形態 肩部が強く張り、上外方に開くやや長い口頸部をもち、口縁下1.5～1.7cmの外面に突帯を有している壺である。総じて形態に差はないが、ただ1点違いがみられる。それは、頸胴部境にある。出作の壺では明瞭な突出がみられるが、東野の壺にはこの突出はみられない。東山の壺は頸部が一部欠損しているため充分な対象資料といい難しいが、観察可能な場所では一部に不明瞭な(低い)突出部分が看取されたが、この突出が全面にみられたとは考えにくい。この突出は、貼り付け凸帯として意図されて施されたものなのか、ナデにより無意識的に生じたものであるかは判断できなかったが、形態として違いが認められる唯一のものとして注目されるものである。

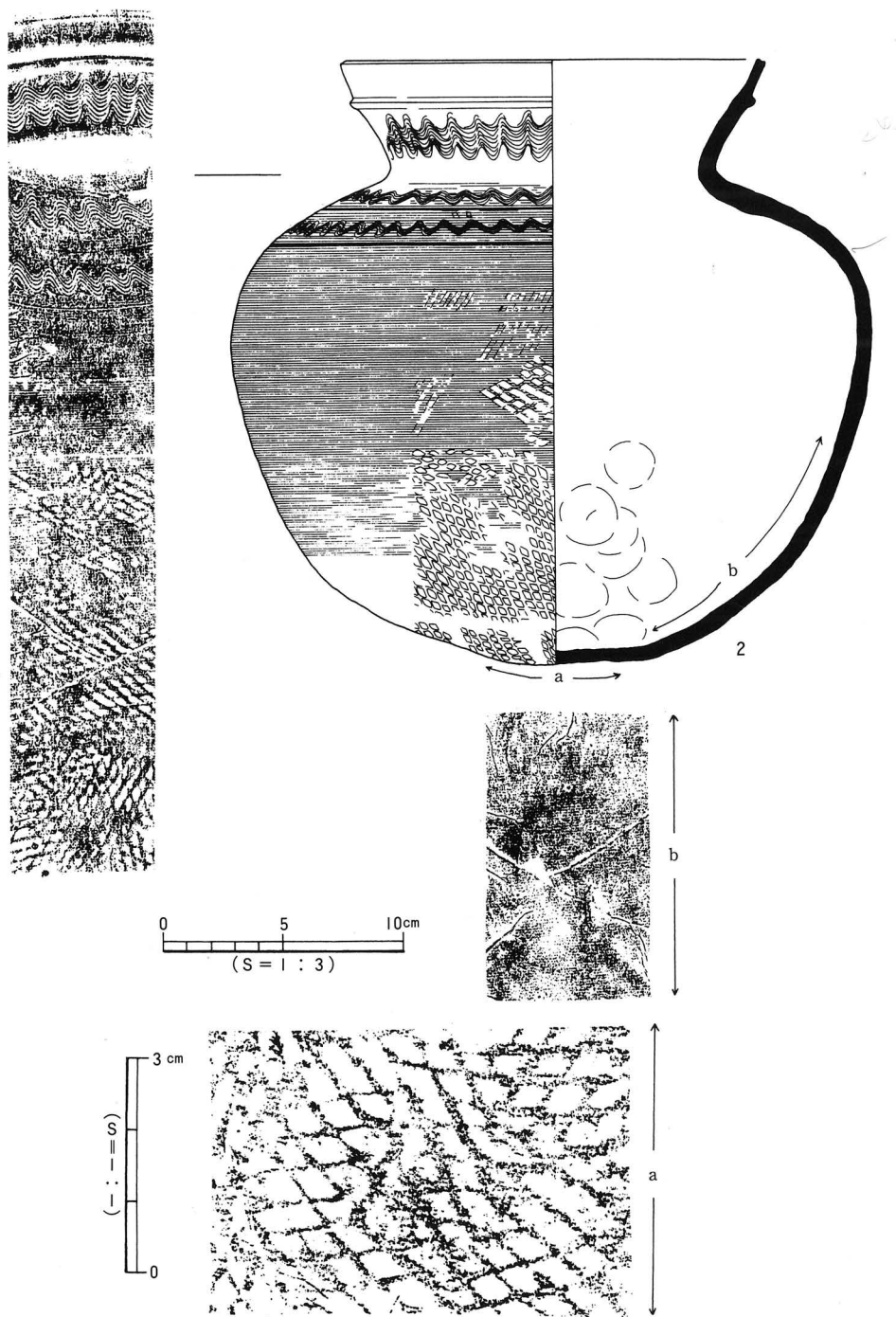
②法量 器高、口径、頸部径、胴部最大径、口縁から口縁下凸帯上までの長さ(以下、「口縁～凸帯長」、口縁部から頸部下端までの長さ(以下、「口頸長」)について計測を行った(表35)。

器高は24.4～25.2cmで2～8mmの差がある。口径は17.4～17.7cmで1～3mmの差、頸部径は13.5～14.2cmで1～7mmの差、胴部最大径は25.8～27.3cmで9～15mmの差、口縁～凸帯長は1.5～1.7cmで1～2mmの差、口頸長は4.8～5.2cmで2～4mmの差となる。

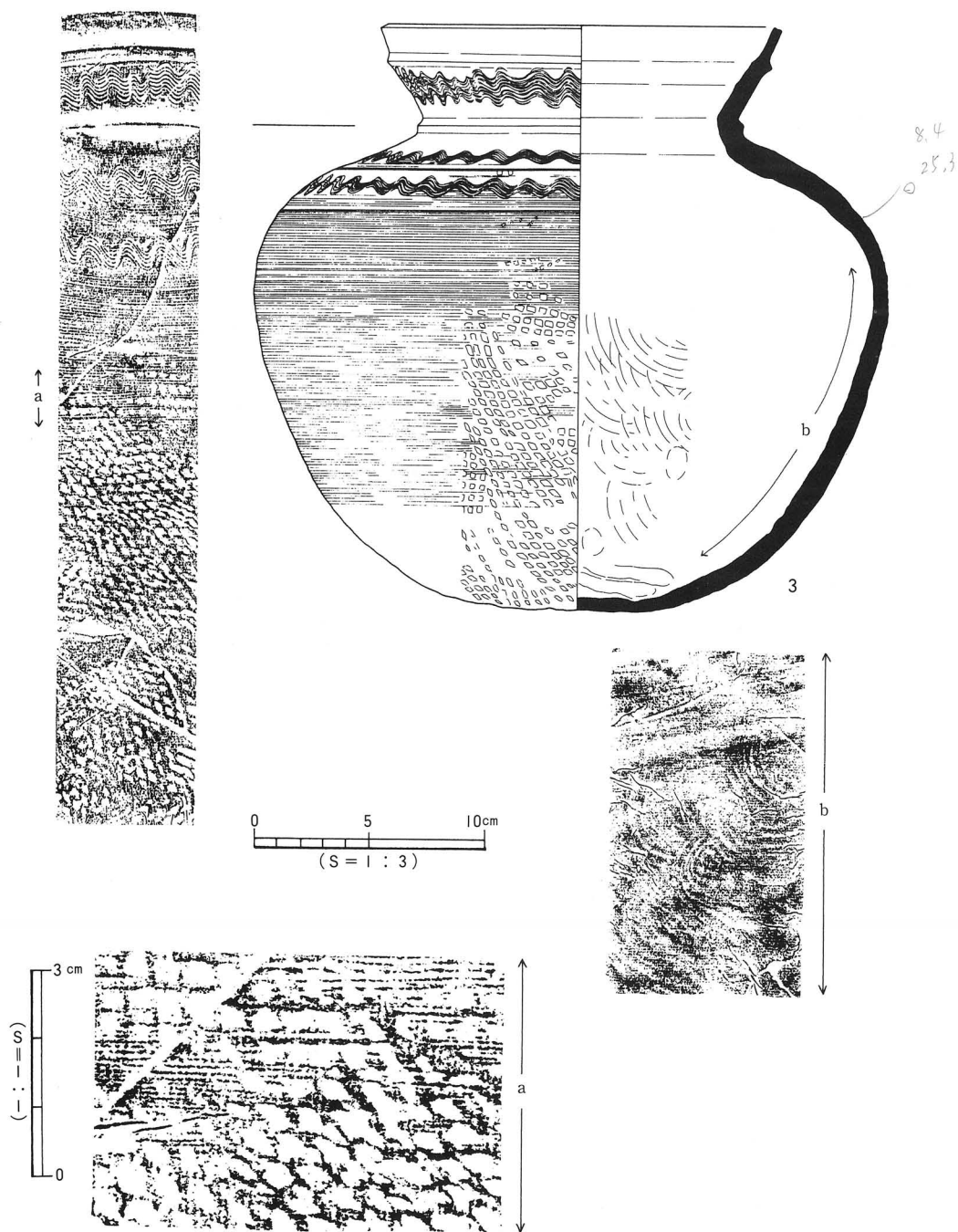
計測の結果、口径、頸部径、口縁～凸帯長、口頸長は2～4mmという差で、極めて近似したものであることが分かる。これに対し、器高と頸部径、さらに胴部最大径は7～15mmでやや差の大きいものとなっていることが分かる。このうち、器高は成形から焼成にいたるまでの土器の移動による底部変化(平坦化等)が最大の要因と考えられ、頸部径は頸部下



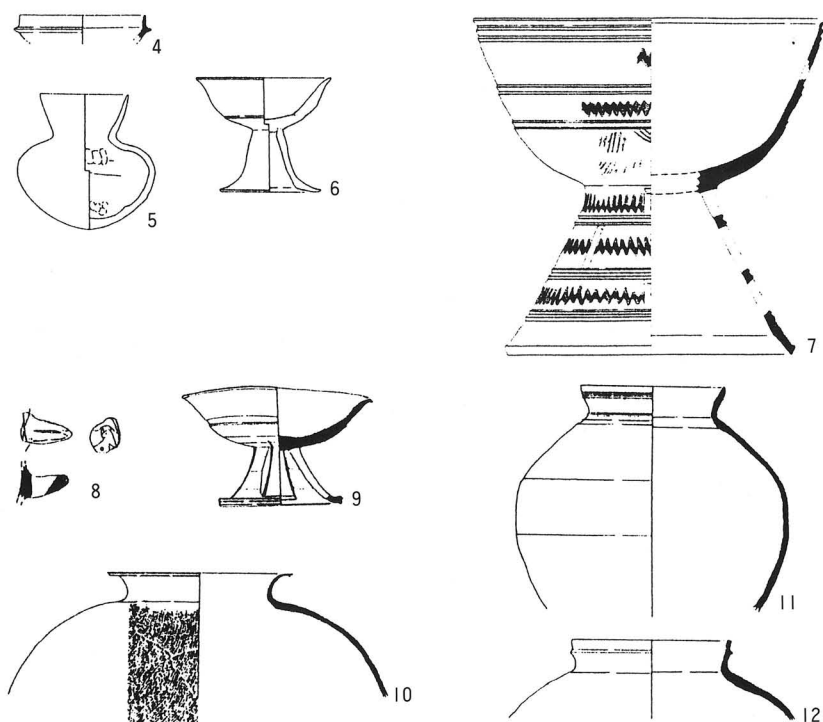
第80図 東山古墳群 5 次調査 T 4 出土遺物



第81図 東野お茶屋台古墳群9号墳出土遺物



第82図 出作遺跡 SX 02出土遺物



4～6：東山古墳群 5 次 T4 7：東野お茶屋台古墳群 9 号墳周溝 8～12：出作遺跡 SX02

第83図 非陶器系壺に伴出する遺物

端の突出の有無が影響しているものと考えられ、両者の計測値差は理解ができるところである。一方、最大差が生じている胴部最大径については東山の壺が最小値で、出作の壺が最大値となっているが、これは器高と同じ傾向を示したものでもあり、結果として胴部の法量差として認められるものであるといえる。

③成形及び調整 成形・調整は3点とも共通する手法及び工程である。

外面は口頸部はナデ、胴部は叩き後上半部はカキ目調整を行う。内面は、底部は当て具ないし指頭や指ナデによる凹凸がみられ、胴部は上半部はナデ、下半部は無文の当て具痕が看取される（亀田修一1989）。内面の口頸部はヨコナデ調整である。調整は、総じて同じ手法となるが、仕上げにわずかな差がみられるものとなっている。

外面の叩きによる成形は観察の結果、胴上半部の波状文の位置（二段の波状文間）に、わずかながら叩き痕が看取されることにより、叩き成形は胴部全体に行われていたことが新たに分かった。また、叩き目の観察では、東山の壺は全面に正格子の目（1辺4mm大）が、東野の壺は全面に斜格子の目（1辺4～5mm）が、出作の壺では上半が正格子（1辺3.5mm）、下半が斜格子（1辺4～4.5mm）の目が看取され、叩き板に違いが認められる。なお、出作の壺では、下半の斜格子の目は上半の正格子の目を覆っているため、叩き成形が上半か

ら下半に、さらに叩き板が正格子から斜格子に移行したことが明らかとなった。

内面では、胴部下半の無文の当て具痕は、東山と出作の壺では当て具の外郭が段として三カ月状に残るが、東野の壺はナデが丁寧に行われた結果丸みのある凹みとして看取されるにすぎないものとなっている（註2）。口頸部から胴部上半は、東山・出作の壺ではナデが強く行われた結果明瞭な稜が生じ、それに対し東野の壺は強いナデが行われない結果明瞭な稜は看取されないものとなっている。

④施文 頸部下半に1段、胴部上半に2段の波状文を施すことを共通としている。

胴部上半の施文工程では、カキ目調整後、出作の壺では施文部分をナデによりカキ目を消した後、波状文を施すものとなっている（東野・東山の壺はカキ目が残る）。この他、二段の波状文間と下部の波状文下位にはカキ目とは違う1条の沈線が認められる。二段の波状文の位置をあたかもこの線により決定したかのようなものである（この線と波状文との切り合いはなく、どちらが先に施されたのかは特定できなかった）。

なお、今回の観察では試行的に、波状文の方向や波状文数を調べた。

波状文の方向は、波状文の上部の方向を「左」・「右」で現すこととした。波状文の方向を頸部のものから胴部のものへと順に記述すると、東山・東野の壺は右・左・左となり、出作の壺は左・右・右となる。また、波状文の数では、東野と出作の壺は、東山の壺よりも1つの波状文がやや小さいことで10個程度多く施されるものとなっている。さらに、櫛目の本数も波状文数と同様な傾向を示し東野と出作の壺は、東山の壺より多く看取された。

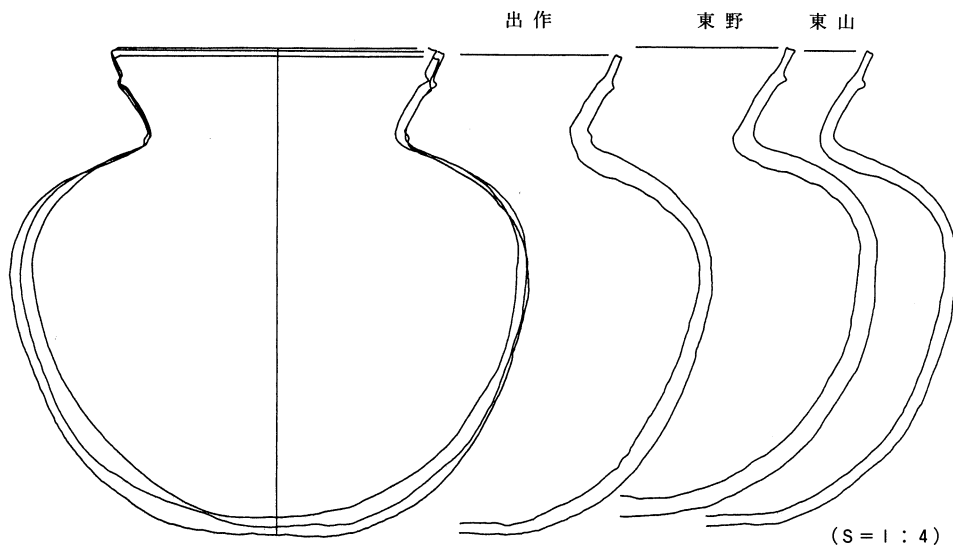
以上、形態、法量、成形・調整、施文について比較を行ってきた。形態と法量では、口頸部の外反の角度も大差なく（第84図）、一定の形態と法量をもっていた、成形・調整、施文では、同じ手法と工程が行われ、工具や仕上げの致密さに限り差がみられるものであった（註3）。よって、東山・東野・出作の壺は細部にわずかな違いをもつが、総じて同じ形質をもつ土器といえるだろう。そして3者間には同一の土器製作概念が存在していたものと考えられる。

3. 集落と流通

さて次に、酷似する非陶邑系須恵器（壺）が出土する遺跡について、遺構や出土遺物、特にその共通性を取り上げ、酷似土器保有（出土）の背景を考えることとする。

1) 東山古墳群と集落

東山古墳群は、現在までのところ5世紀後半から7世紀前半に連綿と墓域として存在していたことが分かっている。5世紀後半～6世紀初頭に比定される須恵器では、陶邑系のものが大多数を占め、非陶邑系のは当該資料と他に数点が出土するにすぎない（註4）。ところで、当該資料の出土状況は、出土地点と共伴遺物において特異な状況を示していた（前述墳丘外で、鉄鏃を伴って出土）。平野内には、墳丘に関する祭祀的行為と思われる資料はあるが（註5）、土器と鉄製品が同時に墳丘外に共献される例は現在までに確認事例はない。よっ



第84図 酷似する壺

て、当該資料である非陶邑系の壺と鉄鏃は、一般的な墳丘内祭祀とは異なる一面をもつものであると考える状況にあるといえる。

次に、東山古墳群に対応する集落であるが、丘陵の西接地では5～7世紀代に比定される竪穴住居址や掘立柱建物跡が多数検出されている。福音寺遺跡、福音寺筋違遺跡、福音小学校構内遺跡、北久米浄蓮寺遺跡などがそれで、川附川と堀越川に挟まれた地域（遺跡）は立地や遺構・遺物の時期より東山古墳に対応する集落域（仮に「福音寺地区」と称す）と考えられる。このうち、筋違H遺跡、福音小学校構内遺跡からは、定森氏が指摘するように陶邑系須恵器とは異系譜の須恵器が10点前後出土している。これ等の遺跡においても、出土量を見るとやはり陶邑系須恵器が主体であり、異なるものは少数にとどまり、出土品が非陶邑系で占められる遺構はないのである（註6）。さて、この地域から検出される遺構には1辺7mにおよぶ大型の方形竪穴住居址（カマド付き）が福音小学校構内遺跡や北久米浄蓮寺遺跡（橋本雄一1993）より検出されており、出土物では福音小学校構内跡から鉄製品や石製玉類（子持ち勾玉1点の他、白玉や勾玉も出土）が出土している。福音寺遺跡一帯は、カマド、鉄製品、石製品を生活に需要するといった、5世紀後半の一つの典型的な集落といえる。

2) 東野お茶屋台古墳群と集落

東野お茶屋台古墳群は、平野の北東部の低位段丘陵に立地するが、隣接する丘陵には他に畑寺竹ヶ谷古墳群などがあり、現在までにこの地域では、5世紀後半から6世紀までに比定される古墳が存在していたことが分かっている。この地域での非陶邑系須恵器の出土は、東野お茶屋台古墳群出土の壺と器台1点のほかに、畑寺竹ヶ谷古墳群から壺の口縁部片1点が

出土しているが（松本敏三1986）、出土品の大多数は陶邑系のもので占められている。

これ等の古墳群に対応する集落は、立地上古墳群の眼下西方にあたる石手川と川附川に挟まれた地域（桑原地区）であると考えられる。この地域は近年の調査により5世紀～6世紀に比定される竪穴式住居址が樽味立添遺跡、樽味高木遺跡で確認されており、これ等の遺跡がいずれかの古墳群に対応するものであると考えている。このうち樽味高木遺跡からは、包含層中であるが5世紀代に比定される軟質土器片（3個体分）が出土しており、松山平野では同資料としては唯一の確認資料となっている。また、桑原本郷遺跡からは、包含層中より5世紀末の須恵器（陶邑系）と100点余りの滑石製白玉が出土している。福音寺遺跡一帯と同じく、5世紀後半～6世紀初頭の注目される資料が、桑原地区からは出土しており、集落の充実度がうかがえる。

3) 出作遺跡と集落・墳墓

出作遺跡は、松山平野南西部にあり、旧重信川と旧大谷川に挟まれた沖積低地の微高地上に立地する。祭祀遺跡として著名であるが、報告書刊行以降、祭祀遺跡として限り評価してよいものなのかという疑問も生まれている（註7）。祭祀遺構のなかで非陶邑系須恵器はある範囲に集中して出土している状況にあり、また出土物全体としては、陶邑系須恵器と土師器が多数を占めている状況にある。検出遺構には、多量の土器・石製品・鉄製品（製品・未製品・素材）を出土した性格不明の遺構3基以外に、溝2条と調査区内の北部分で方形の竪穴式住居址が検出されている。住居址は性格不明遺構と同時期であるのかは判断されていないが、一部の担当者は検出遺構は同時代・同集落内の一部分にあたり、方形住居址も同時期に存在していたものと想定され则认为している。ただし、該当資料以降、周辺地域での発掘調査がないため、出作遺跡周辺の集落様相は想像の域をでないのが現状である。一方、墓域については、5世紀代に比定される古墳が、出作遺跡の南東1.5kmにある。猪窪古墳と呼ばれているもので、調査の結果鉄製品と鉄生産に関わる遺物が出土しており、時期的及び出土資料的にも出作遺跡と関係が強い古墳と考えられている。出作遺跡の集落分析については、今後の資料に期待するところが大きいのである（註8）。

東山古墳群・東野古墳群とその集落、出作遺跡とその周辺遺跡を概観したが、そこには幾つかの共通する現象がみられる。一つは、非陶邑系須恵器の出土量（少なさ）、二つには5世紀代集落に需要される新しい文化の移入と定着化である。

松山平野では、東山古墳群、東野お茶屋台古墳群、出作遺跡の他に、非陶邑系須恵器は福音寺筋違H遺跡、福音小学校構内遺跡、五郎兵衛谷古墳、素鷲小学校構内遺跡等数ヶ所の遺跡から出土がみられる。いずれも、その出土量は出作遺跡を除くと10点に満たない量であり、伴出ないし、同遺跡から出土する（5世紀後半から6世紀初頭の）須恵器は、大多数が陶邑系のもので占められているという状況にある。

つづいて、非陶邑系須恵器出土の地域性を考えると、5世紀後半の集落ではカマドや鉄製品、石製模造品が使用され、墳墓では群集墳が成立している状況にある。そして福音寺地区（東山古墳や福音寺遺跡等）と、桑原地区（東野お茶屋台古墳群や樽味高木遺跡等）には6世紀前半に比定される前方後円墳が地域境とその周辺に存在している（註9）。集落においても5世紀後半に充実する集落経営が6世紀にも継続し、そして6世紀前半には該当集落は平野の要地として存在していたものと想定される状況にあるのである。

このように、非陶邑系須恵器は5世紀後半から6世紀に経済的に充実をみせる集落に、少量が移入され、しかも非日常的な形で存在する傾向が高いものであるといえる。

4. まとめ

松山平野で出土した非陶邑系須恵器について、酷似する3点に注目し、その類似性を追究した。その結果、3点については同じ形質であり、その差異は製作工程における最終段階で、工具や手法（調整）という細かい点で認められるにすぎないことが分かった。一方では課題も生じた。法量では、成形→乾燥→焼成に至る過程において土器自体は収縮するものであり、それがどれほどのものになるかを鑑みなければならず、個体差（収縮率と許容範囲）の研究が必要であるといえる（註10）。

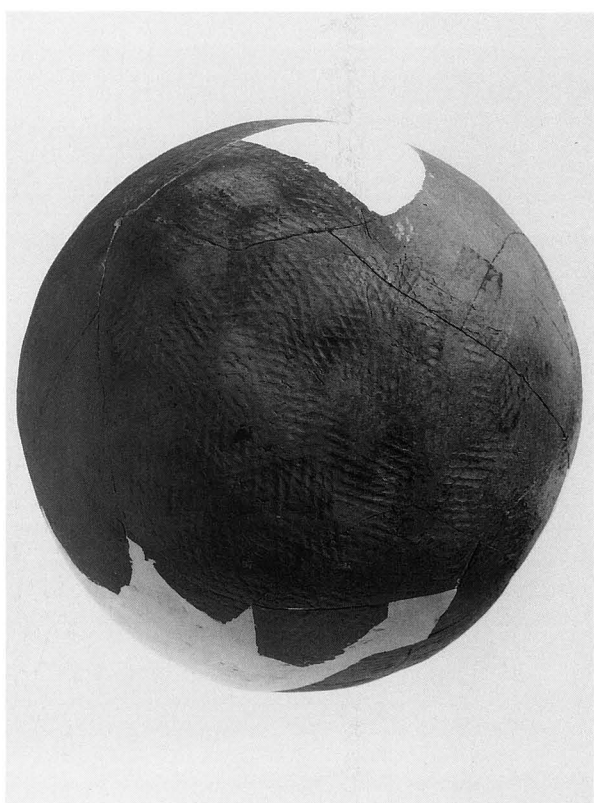
さて、松山平野における非陶邑系須恵器は、長井氏の調査により窯址が確認されたことで古くより当平野で生産が開始され、そのなかで出現するものであると考えられる。そして、今回取り上げた3点を含め非陶邑系須恵器は松山平野においては6世紀初頭まで集落内に存在していた可能性が近年の調査により想定されるところである。6世紀第1四半紀以降は、細部に在地的要素をもつが、基本的には陶邑系須恵器で占められることになるのである。ここで問題となるのは、6世紀第1四半期以降の非陶邑系須恵器の工人集団の動態である。想定されることは、非陶邑系の工人集団は、6世紀第1四半紀以降平野を退出するか、平野にとどまり、平野に存在する陶邑系の工人集団に同化するかの二つの選択がある（註11）。このどちらを選択したにしろ、5世紀後半に存在した非陶邑系の土器作りは遅くとも6世紀初頭に大きな変化を生じたことになる。

また、いまひとつ問題となるのは、非陶邑系の土器作りの出自と分布である。松山平野のものについては、松本敏三氏や亀田修一氏、そして定森氏より朝鮮半島南部に類例や出自を求める見会がある（註12）。筆者は、現在この問題に対し自論をもちえないが、定森氏が提唱する半島南部にルーツが求められることを支持しておきたい。

そこで、本稿で取り上げた酷似する壺3点の製作に関わる問題である。酷似する壺3点はその形態（口頸部形態）や頸部の突帯等において類似例が日本にはないということで、半島南部にルーツを持ち、当平野で生産された土器と考える。さらに、平野内にも多量に出土がないため、複数工人による生産というよりは「一工人による生産品」として積極的に考える



第85図 東山古墳群・出作遺跡出土遺物



第86図 東野お茶屋台古墳群出土遺物

ものである。

以上、松山平野で出土した酷似する非陶邑系須恵器壺の比較研究より、当平野の須恵器生産と社会構造を一部ではあるが明らかとした。今後は非陶邑系須恵器を製作した工人の出自と終えん、また5世紀後半から6世紀初頭に出現するカマドや鉄製品の製作等が平野のなかにいかに受け入れられたかなどを分析し、古墳時代中期～後期の社会構造を明らかとしなければならないだろう。

最後になったが、本稿を成すにあたり定森秀夫氏、村上恭通氏、谷若倫郎氏、西川真美氏、大政哲志氏、宮内慎一氏、山之内志郎氏、水口あをい氏、山下満佐子氏、松山桂子氏、平岡直美氏には、多大の助言と協力をいただいた。文末ながら記して感謝の意を表すものである。また、執筆の機会と脱稿が遅れたにも関わらず配慮をいただいた編集の田城武志氏には深謝申し上げる。本稿については、不勉強なところが多く、関係機関や先学者に多少なりとも迷惑をおかけすることとなるであろうが容赦願いたい。

〔文献〕 橋口達也 1990 「須恵器」『日本考古学協会1990年度大会研究発表要旨』。長井数秋 1992 「松山平野の須恵器編年」『愛媛考古学』12号 愛媛考古学協会。定森秀夫 1993 「出作遺跡の非陶邑系須恵器・陶質土器」『出作遺跡Ⅰ』松前町教育委員会。田城武志 1994 『東山古墳群―第4・5次調査―』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター。阪本安光 1979 『東野遺跡埋蔵文化財調査報告書』愛媛県教育委員会。相田則美他 1993 『出作遺跡Ⅰ』松前町教育委員会。亀田修一 1989 「陶製無文当て具小考」『生産と流通の考古学』松山浩一先生退官記念論文集Ⅰ。橋本雄一 1993 『北久米浄蓮寺遺跡～3次調査地～』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター。松本敏三 1986 「四国地方」『日本陶磁の源流』柏書房。

〔註〕 1) 調査関係者の一部には、人工的溝ではないかという指摘もある。2) 亀田氏が指摘する木製の無文当て具の可能性を、東山と出作の壺はもっている。3) 3点とも、色調は緑色が強いものである。また、胴部最大部に指頭状の凹みが1個体に2～3ヶ所見られることも共通点としてあげられる。4) 東山古墳群4次調査の9号墳周溝内からは、非陶邑系須恵器の高坏1点、壺2点が出土している。5) 市内大峰ヶ台に立地する客谷古墳B地区2号墳には、墳丘に須恵器の大甕2点と甕1点が埋められていた。6) 非陶邑系須恵器は、単独で出土する例は基本的にない。7) 平成6年7月瀬戸内海考古学研究会にて議論された。例えば鉄製作や遺構内出土遺物の時期をどう考えるかなど。8) 近年の調査で、伊予市内教育委員会による出作遺跡の南西約2.5kmの地点にある片山太郎丸遺跡の調査が実施され、出土物中に非陶邑系須恵器が管見でき、出作遺跡とは違う(狭義)集落の存在が想定される。森光晴 1993 『下三谷片山・太郎丸埋蔵文化財調査報告書』伊予市教育委員会。9) 経石山古墳や三島神社古墳という5世紀末～6世紀中頃に比定される前方後円墳がある。10) 焼成時に陶器では15～16%、磁器では18～20%の収縮があり、個体差は必ず生ずるという。伊予郡砥部町砥部焼伝統産業会館武本館長氏の御教示による。11) 筆者は、今回対象とする壺と同形態を有するものが、6世紀代に平野の内外で出土しないため、退出というよりは同化したものとして考えている。12) 松本敏三 1986 「四国地方の須恵器窯」『考古学ジャーナル』。亀田修一 1989 「中国・四国地域」『陶器土器の国際交流』柏書房。定森秀夫 1993 「出作遺跡の非陶邑系須恵器・陶質土器」『出作遺跡Ⅰ』松前町教育委員会。

本稿は、松山市考古館平成4年度企画展記念講演会「弥生・古墳時代の集落変遷」において、筆者が発表した要旨を加筆・修正したものである。資料の実見に際しては、愛媛県教育委員会、松前町教育委員会、松山市考古館には配慮をいただいた。記して感謝申し上げるしだいである。